

現場周辺

平成27年度
産業廃棄物不法投棄現場周辺環境モニタリング調査及びデータ解析業務

岐阜市椿洞地内原川 外10か所

調査結果報告書
概要版

平成28年3月

岐阜市 自然共生部 自然環境課

産業廃棄物不法投棄現場周辺モニタリング調査結果総括（平成27年度 年間）

1. 業務の目的

本調査は、岐阜市椿洞地区に不法投棄された産業廃棄物について、周辺の水・土・大気環境に与える特定支障除去事業対策工事後の現場内からの影響を継続的に調査し、それらの異変を速やかに把握すると共に、必要となる対策に資することを目的としたものである。

2. 調査の項目

調査対象	調査の目的	評価対象とした基準	調査地点	調査地点の選定理由
水	地下水	地下水の汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	観測井戸 GW-1 GW-5	現場からの旧谷筋、原川流域の中央付近(GW-1 ~5)を選定する
	河川水	場内排水等による河川水汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	環境基準・河川B類型基準・農業用水基準	原川の上流 RW-4 ・下流 RW-5
	排水	現場排水の汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	排水基準（参考値）	場内浸出水 D-1 調整池排水 D-2 D-3
	河川底質	現場排水による汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	土壌含有量基準（参考値）	現場排水の原川上流 RS-1 下流 RS-2
土	土壌	粉塵による周辺土壌の汚染状況を把握し、現場内からの影響を確認する	土壌含有量基準・環境基準	周辺住居 S-3
大気	ダイオキシン類	汚染物質の飛散拡散状況を把握し、現場内からの影響を確認する	環境基準	周辺住居 A-3

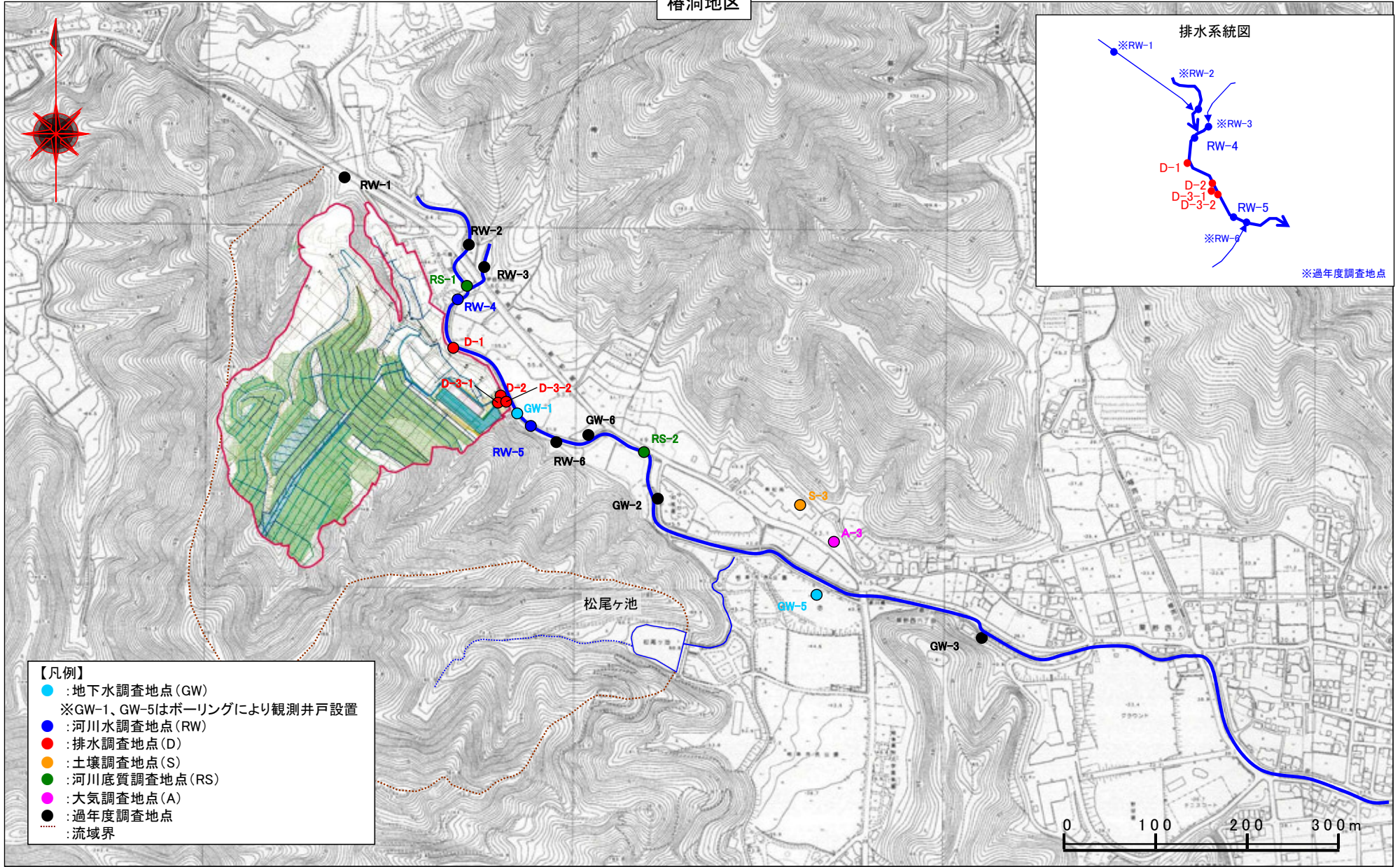
3. 調査結果の総括

調査対象	基準項目	総括評価	今年度の傾向、今後の課題	備考
地下水	環境基準項目	実施した項目は、全て 地下水環境基準に適合 していた。大きな水質の変動もなく、問題となる周辺への影響は特にないと考えられる。	これまでの水質濃度と同様な傾向を示し、イオン組成も大きな変化は見られない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P4~5
	生活環境・監視項目	平成22年から開始された支障除去事業対策工事は平成24年度に完了し、その後も水質濃度に 大きな変化は見られなかった 。不法投棄現場からの有機性汚濁による影響は、地下水のBOD、COD、TOC濃度からは認められない。GW-1の水質変動の要因は、これまでの変動の様子から、降雨による一次的な変動を示すものであり、特に河川水による影響と思われる。		
河川水	環境基準項目	実施した項目は、全て 河川環境基準に適合 していた。大きな水質の変動もなく、問題となる数値は見られない。現場内からの影響は特にないと考えられる。	河川水は、これまでの水質濃度と同様な傾向を示し、概ねRW-4≒RW-5の関係にあり、イオン組成も大きな変動は見られない。ただし、H28.1月調査においては、一時的にカルシウムイオン、塩化物イオンの濃度に上昇が見られた。これは、一過性の変動であり、調査当日の降雪に伴い散布されたと考えられる融雪剤等の影響と考えられる。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P6~7
	生活環境・監視項目	実施した項目からは、直ちに 問題がある数値は認められない 。河川水の水質は、降雨による影響で一時的な変動があるものの、昨年度に引き続き大きな変動は見られない。		
排水	環境基準項目	実施した項目（排水D-3-1のpHを除く）は、 比較参考とした排水基準に適合 していた。現場内からの影響は特にないと考えられる。	排水D-1は、これまでの水質濃度と同様な傾向を示し、大きな変化は見られない。排水D-2及びD-3-2は、昨年度に引き続き、強い降雨時以外に流水が確認されない状況である。排水D-3-1は、夏季のpHに基準値超過がみられるが、その原因は水路に繁殖した藻類の光合成によるものと考えられ、河川への影響はみられない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P8~10
	生活環境・監視項目	排水は、降雨による場内整形盛土への雨水浸透の影響や水路に繁茂する藻類の影響で、水質濃度に変動が見られるものの、 比較参考とした排水基準に適合 していた。		
河川底質	含有量基準項目	実施した項目は、 比較参考とした土壌汚染対策法の土壌含有量基準に適合 していた。現場内からの周辺への影響は特にないと考えられる。河川底質は、長期における河川の状況を把握するものであるが、平成27年度も排水放流による影響は認められない。	過年度までと同様な数値を示し、変化は認められない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。今後も、場内における形質変更に伴う環境影響について監視を行うものとする。	概要版 P11
土 壌	含有量基準項目	調査指針値や環境基準値を大きく下回る数値であり、 粉塵降下の影響は認められない 。	過年度までと同様に、調査指針値や環境基準値を大きく下回る数値を継続している。対策工事後も、現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。支障除去工事終了から2年以上が経過し、場内止水壁撤去工事中、及び工事終了の調査において基準超過は確認されていないことから、調査終了とする。（次年度モニタリング計画参照）	概要版 P11
大 気	環境基準項目	ダイオキシン類は、 大気環境基準に適合 していた。現場内からの影響は特にないと考えられる。	過年度までと同様な数値を示し、変化は認められない。対策工事後の現場内からの周辺への影響は、これまで認められない。支障除去工事終了から2年以上が経過し、場内止水壁撤去工事中、及び工事終了の調査において基準超過は確認されていないことから、調査終了とする。（次年度モニタリング計画参照）	概要版 P11

◎総合評価
 現場周辺の水、大気、土壌等は、**環境基準に適合**している。支障除去事業における対策工事がH24年度に完了し、H26年度には場内止水壁の推進工が実施された。本年度も過年度に引き続き、場内からの影響の有無を把握する目的で調査を行ってきたが、調査結果からはこれまでに問題となる周辺への影響は特認められない。今後も、**環境への影響を監視**する。

モニタリング調査位置図

椿洞地区



1.地下水

■ 環境基準項目

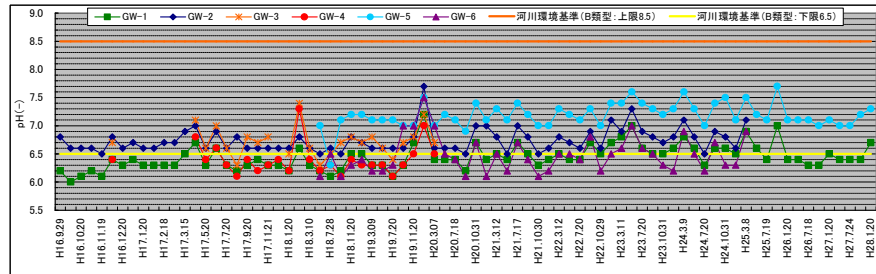
大きな水質の変動もなく、問題となる周辺への影響は特にないと考えられる。(H27.4.20, H27.7.24, H27.10.20, H28.1.20実施)

■ 生活環境項目

調査を開始した平成16年から、大きな変化は見られない。
 平成20年度後期から実施された支障除去事業による工事中も変化は見られず、工事終了後も異常は見られていない。
 不法投棄現場からの有機性汚濁による影響は、BOD、COD、TOC等の濃度からは認められない。
 GW-1は、原川河川水の水質パターンに類似していることから、原川の影響を受けていると思われる。
 一方、観測井戸のGW-5は不法投棄現場から離れた位置で、電気伝導率がほぼ浅層地下水程度の値を示していることから、不法投棄現場の影響は無いと考えられる。

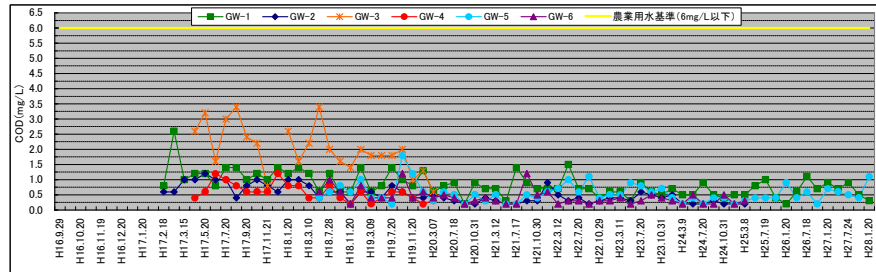
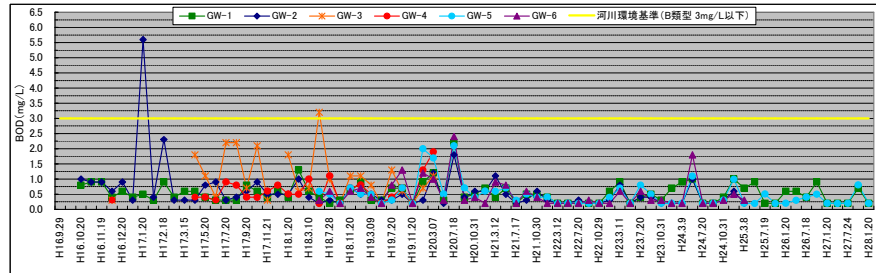
①水素イオン濃度 (pH)

pH値は、GW-5では弱アルカリ性を示し河川B類型の環境基準値に適合していたが、GW-1では弱酸性を示すなど、環境基準値に適合していない月も確認される。これは、河川水の伏流水などによる外的環境に起因した変動とみられ、過年度から散見される傾向である。
 なお、飲料水の基準値(厚生労働省令第101号 水道法基準)5.8~8.6には適合していた。



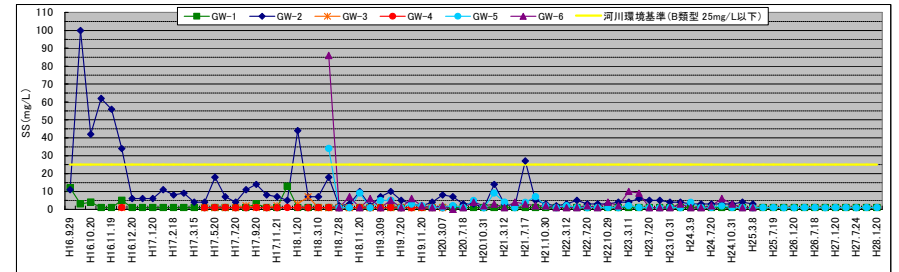
②生物化学的酸素要求量 (BOD)、化学的酸素要求量 (COD)

BODは、B類型の環境基準値3mg/L以下に適合していた。
 CODは、全ての調査日で農業用水基準値6mg/L以下に適合していた。



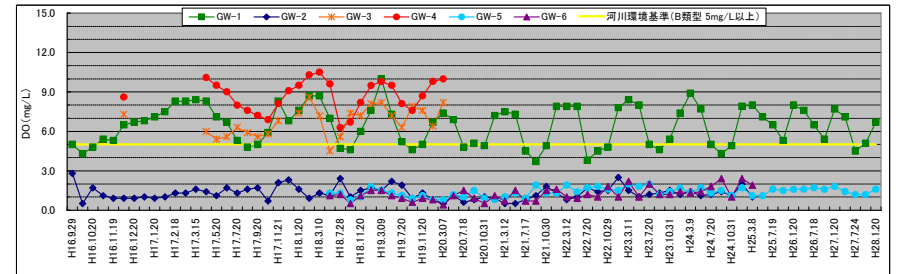
③浮遊物質量 (SS)

過年度に引き続き、本年度も環境基準値 (B類型) 25mg/L以下に適合していた。



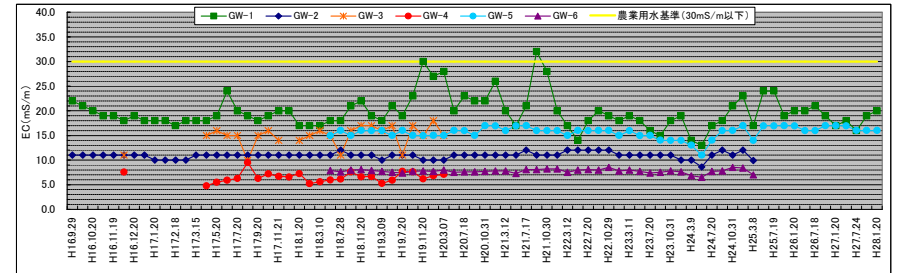
④溶存酸素 (DO)

DO値はGW-1地点において、概ねB類型の環境基準値5mg/L以上に適合していた。
 GW-5地点は低濃度で推移しているが、BODやアンモニア性窒素の濃度は問題ないことから、廃棄物の有機物(汚泥等)由来ではなく、観測井戸の深度が深いため、空気中の酸素供給不足や土の還元状態を反映した変動と推察される。



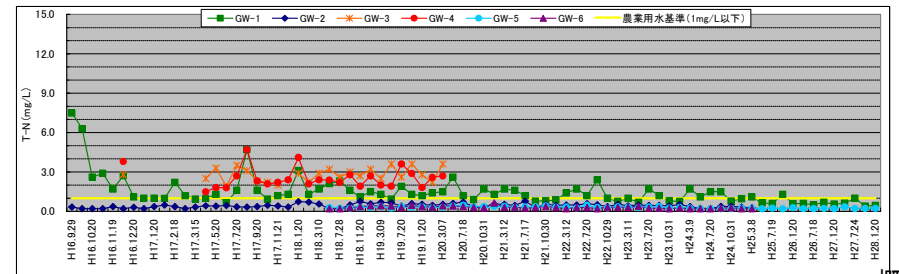
⑤電気伝導率

電気伝導率は、全ての地点にて農業用水基準値30mS/m以下に適合していた。
 地点別には、GW-1が、GW-5よりやや高めの濃度で推移して変動幅も大きい。その変動幅は収束しつつある。



⑥全窒素 (T-N)

本年度も昨年度と同様に、各地点とも低い濃度で推移している。
 BOD、COD及びアンモニア性窒素が高い場合は、廃棄物由来の可能性もあるが、各箇所とも全窒素濃度≒硝酸性窒素濃度となっており、窒素形態としてはほぼ硝化されていると考えられる。
 アンモニア性窒素は不安定で硝酸への移行も早いこと、有機性の汚濁も観測されず、不法投棄現場からの影響はないと考えられる。



⑦イオン類

下図に、ヘキサダイアグラムとトリニアダイアグラムを示す。(上流⇒下流の順)

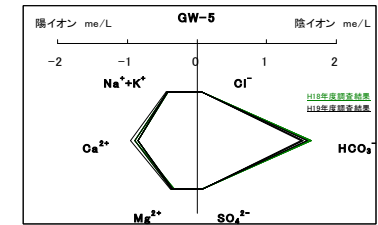
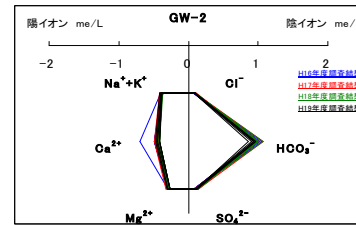
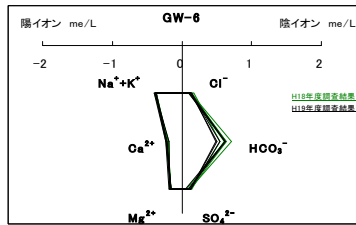
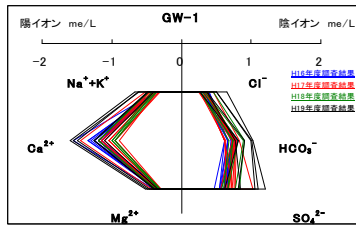
GW-1のイオン成分は、変動幅は経年ごとに小さくなっている。また、水質は調査開始当初はV中間型を示していたが、経年ごとにI炭酸カルシウム型へと移行している。

GW-1は河川水の水質に酷似しており、河川水の影響を顕著に受ける地点であると考えられるため、河川水の水質変化に起因するものと推察される。

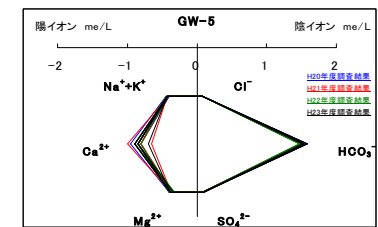
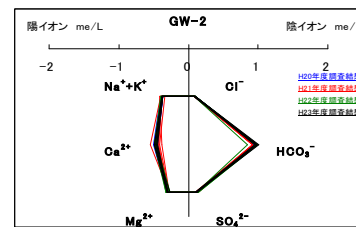
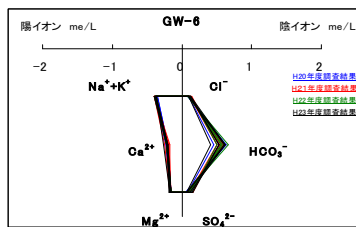
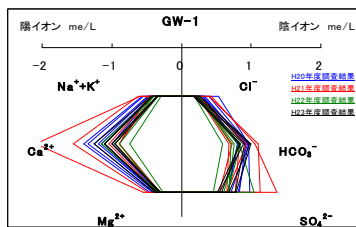
GW-5は、I炭酸カルシウム型を示し重炭酸イオンに富んだ型であり変動幅が小さい。

ヘキサダイアグラム

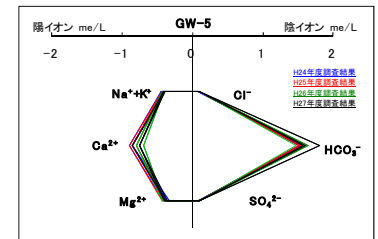
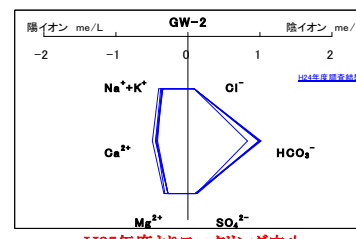
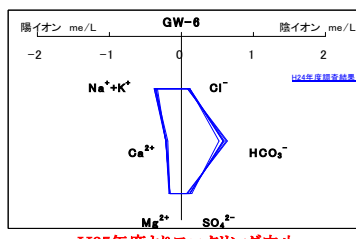
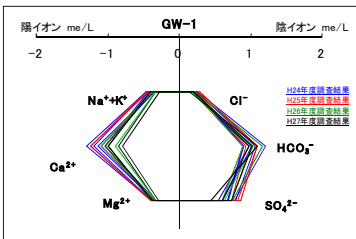
H16～19年度



H20～23年度



H24～27年度

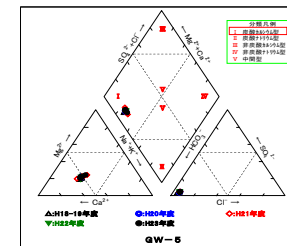
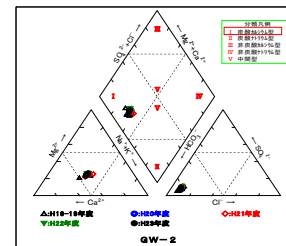
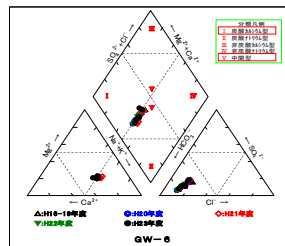
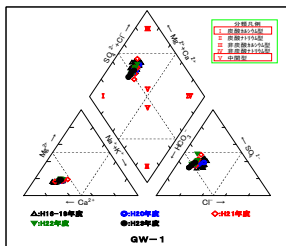


H25年度よりモニタリング中止

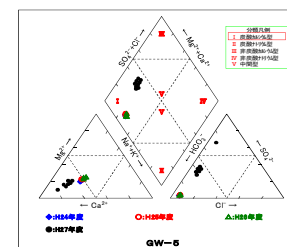
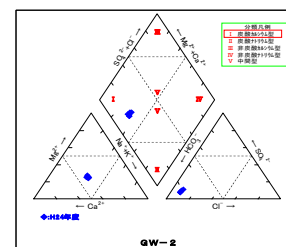
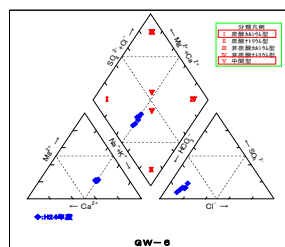
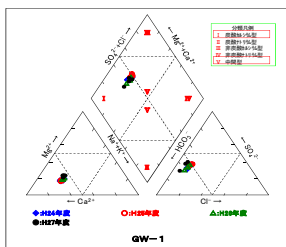
H25年度よりモニタリング中止

トリニアダイアグラム

H16～23年度



H24～27年度

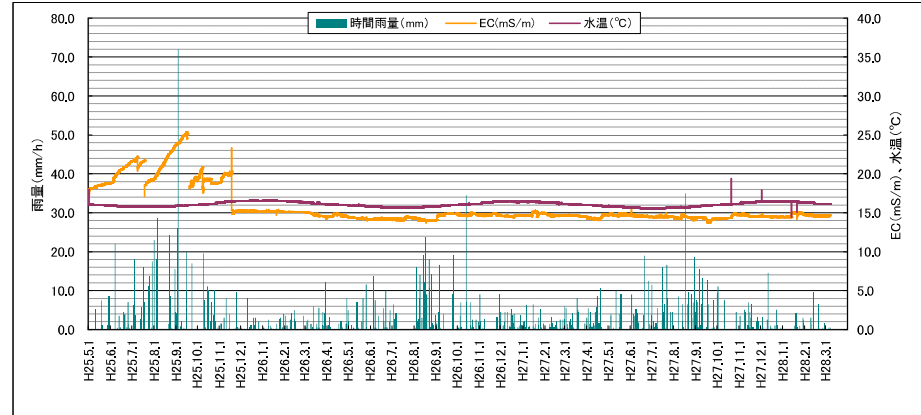
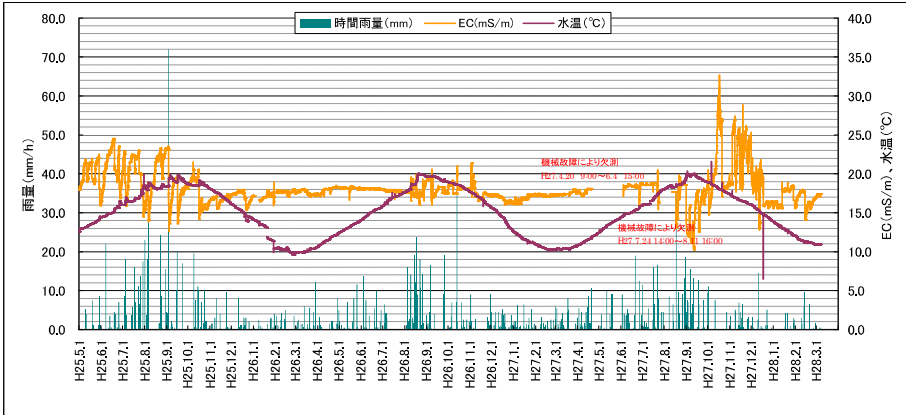
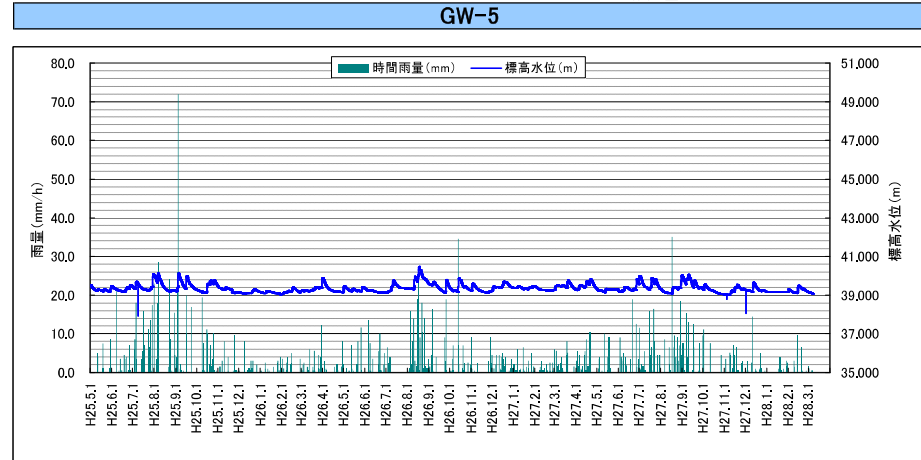
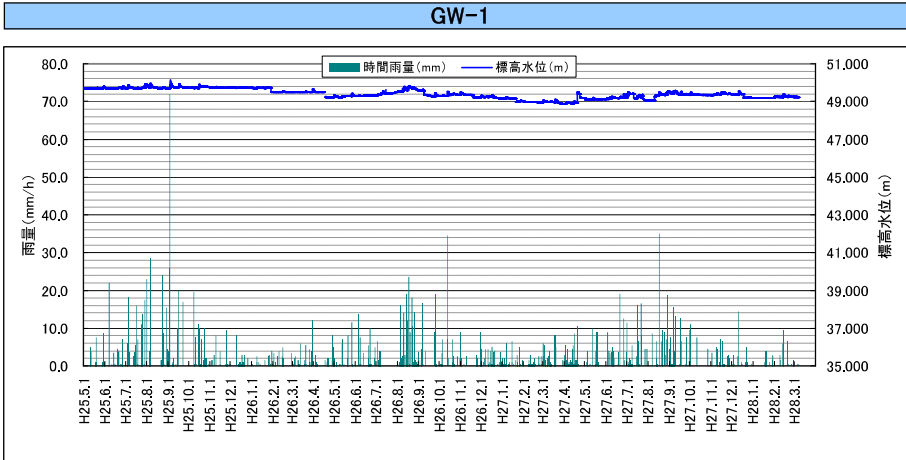


H25年度よりモニタリング中止

H25年度よりモニタリング中止

【地下水連続観測】

最終データ回収日：H28.03.07
 ※雨量データ：場内調査 気象観測データより
 時間雨量はH28.03.15まで



◆ 地下水水位
 降雨により水位が上昇する。年間を通じて、豊水期に上昇、渇水期に下降する変化が認められ、平成28年3月はこれまでと同様の標高水位である (WL=49.2m前後) 河川水の水位と運動していると思われる変動幅は小さい。水位の変動は、降雨直後に現れており河川増水時の影響を受けていると考えられる。

◆ 水温・電気伝導率
 降雨直後は一時的にECが低下し、雨水による希釈効果と考えられる。過年度までは、長期間にわたり降雨が無いとECが上昇し、ECの変動幅は大きく、周辺地下水質の変化ではなく、外的要因である原川河川水による影響が強いと思われる。H25年末以降は、ECの日々の変動幅が小さく推移している。これは、この期間の降水量が少なかったことが関係していると考えられる。H26年8月中旬以降は、まとまった降雨があり、ECが再び変動し始めている。平成27年8月中旬までは過年度と同様に豊水期に高かったが、8月中旬以降の降水量が減少し、全体として値が大きくなる傾向にある。ただし、10月中旬頃には、雨が降っていない状況で値が上昇し、11月末まで値も高く、また変動も大きい傾向にあった。その後は大きな値を示さず、H28.1月の結果においても大きな変動は見られなかった。H28.1月末~2月は降雨による影響でやや上昇傾向にあったが、その後は3月上旬まで概ねEC=17mS/m前後で安定した状態にある。

なお、GW-1のオン補成は、H25年度とH26年度と比較し、平成28年度(3月現在)においても類似しているため、水質には大きな変化はないと考えられる。これまでの調査結果から、降雨等による変化はあるものの、継続的な上昇変化は認められない。

◆ 水温は、GW-5とは異なる変化で、本地点は河川水の影響を受けていることや、帯水層が地上に近く、外気温に左右されやすい状態にある。

◆ H28年度の変化
 水位の変動は、これまでと同様な変化を示し、GW-5に比べて変動幅は小さい。ECが8月後半から11月上旬にかけてやや高い値を示したが、12月以降は低下し、その後は小刻みな変動を示している。この要因としては河川水の流入(直近での伏流水)や降雨による影響と考えられる。

◆ 地下水水位
 降雨による水位の上昇が若干のタイムラグはあるが鋭敏に現れている。GW-1に比べて降雨時の水位上昇が比較的大きい。全体の傾向としては6月から10月までの豊水期に高く、11月以降2月頃までの渇水期に低いという季節変動を示す。標高水位は概ね39m前後である。

◆ 水温・電気伝導率
 ECは、これまでの調査結果から緩やかな季節変動による多少の上下動はあるが大きな変化は認められない。ECは、14.0mS/m程度で安定して推移しており、H28.3月現在も特に異常な値は示していない。浅層地下水の一般的水質を反映していると思われる。水温は、地表外気温の影響は小さく、変動幅も極めて小さい。

◆ H28年度の変化
 降雨による水位変動は鋭敏である。、水位上昇は降雨の形態や日数、さらに日降水量、時間降水量の多少、または強弱に影響されていると思われる。ECは、季節変動や降雨による影響があるものの比較的安定して推移しており、大きな変化はみられない。

2.河川水

■ 環境基準項目

大きな水質の変動もなく、問題となる周辺への影響は特にないと考えられる。(H27.4.20、H27.7.24、H27.10.20、H28.1.20実施)

■ 生活環境項目

実施した分析項目に、直ちに問題がある数値は認められない。

近年、原川本川における不法投棄現場の上流部RW-4地点と下流部RW-5地点の各項目の濃度は、RW-4≒RW-5の関係が多く、場内排水が流入後の、下流部RW-5での影響はほとんどみられない。

また、H26年8月に場内止水壁の推進工が実施されたが、この工事後の平成27年度調査でも周辺環境への影響も見られない。

①水素イオン濃度 (pH)

pH値は、2地点全てにおいて、ややアルカリ性を示すが環境基準値(B類型) 6.5～8.5に適合していた。

②生物学的酸素要求量 (BOD)、化学的酸素要求量 (COD)

BOD値は、2地点全てにおいて、環境基準値(B類型) 3mg/L以下に適合していた。

COD値は、2地点全てにおいて、農業用水基準値6mg/L以下に適合していた。

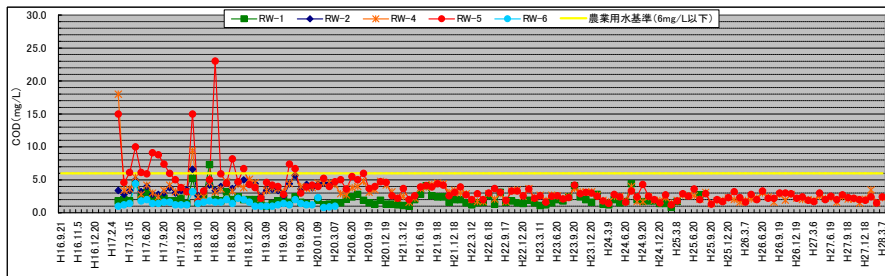
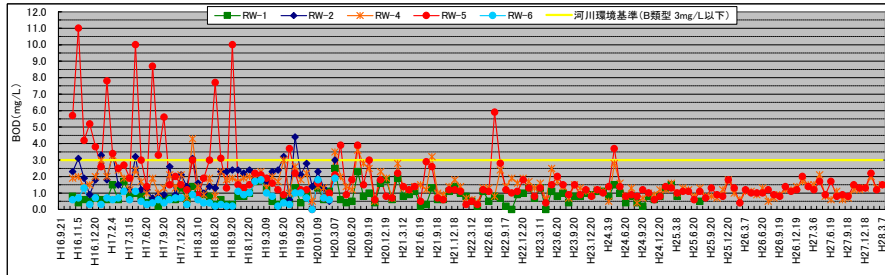
原川本川は、BOD、CODがRW-4<RW-5の濃度関係となる状況が、過年度から散見される。

H21年度以前は、RW-4とRW-5との間で流入する排水D-1、2に起因して濃度が変動していたと考えられる。

H21年度以降は、RW-4とRW-5の濃度の差が小さくなり、濃度の変動幅も安定している。

H24年度に場内における対策工事は終了しており、H24年度以降の濃度の変動は排水に起因するものではなく、降雨による流量の多少に起因すると考えられる。

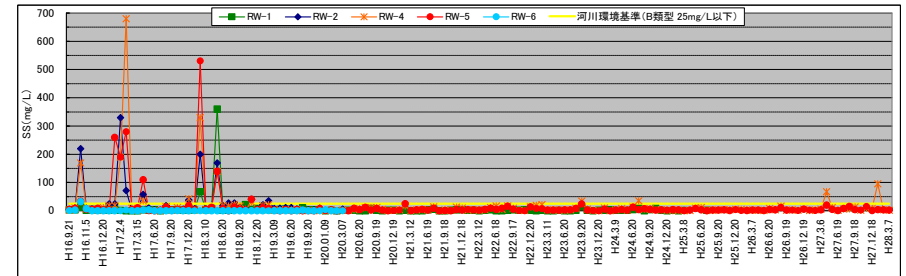
また、本現場内からの排水や浸透水の流入も河川流量に比べると非常に少ないことから、現場内から流下する水による河川への影響はないと考えられる。



③浮遊物質量 (SS)

環境基準値(B類型)の25mg/L以下に概ね適合していた。

H27年度は、概ねRW-4>RW-5の濃度関係にあり、4月、1月を除き基準値以下であるため、場内からの排水の影響は少ないと考。4月、1月のRW-4における基準超過は、ともに降雨や融雪による流量の増大(流速が増す)が掃流力を増加させた結果、浮遊物質一時的に多く流れたものと推定される。



④溶存酸素 (DO)

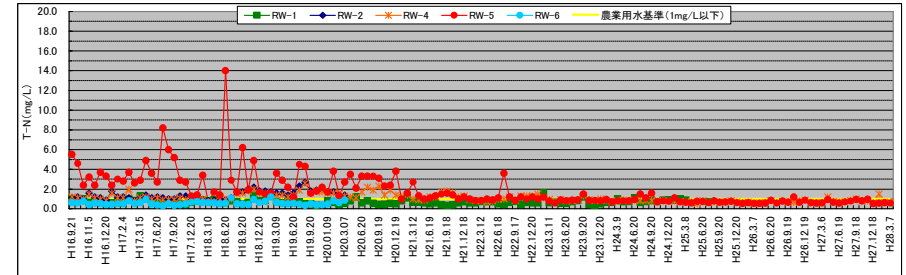
DO値は2地点全てにおいて、環境基準値(B類型) 5mg/L以上に適合していた。

⑤全窒素 (T-N)

原川本川は、T-N濃度がRW-4<RW-5の濃度関係となる状況が、過年度から散見される。

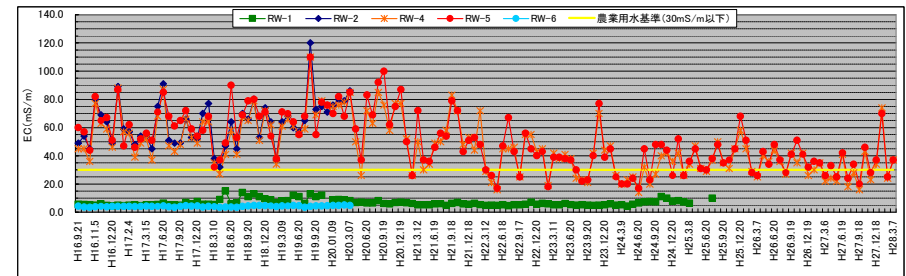
平成21年度以降は、RW-4≒RW-5の濃度関係にあり、場内排水の影響はあまり見られない。

本年度は多少増減はあるものの、比較的安定した濃度で推移した。



⑥電気伝導率

原川本川であるRW-4、RW-5は、H21年度以前は20～120mS/mで推移していたが、H21年度以降はばらつきが比較的安定し、H26年度は22～51mS/mで推移していたが、本年度は降雨や融雪水の流入による影響で最大76mS/mを示すなど、全般にばらつきの多い1年であった。



⑦イオン類

下図に、ヘキサダイアグラムとトリニアダイアグラムを示す。(上流⇒下流の順)

原川上流部RW-4では、これまで排水D-1、2の合流前から既にカルシウム、硫酸イオンに富んだ型を示していたが、硫酸イオンの溶出はH21年度から抑制されている。

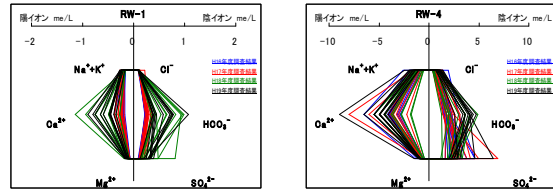
RW-4、5のイオン成分の変動幅は、経年ごとに小さくなってきている。

RW-4、5のイオン成分は、非炭酸カルシウム、中間型であったものが、経年ごとに炭酸カルシウム型へ移行しており、原川上流部におけるなんらかの環境変化により水質が変化しているものと推察される。

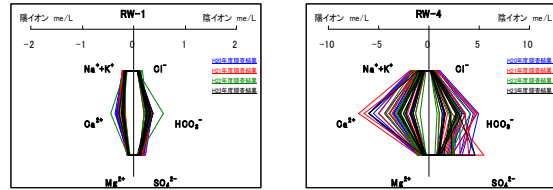
本年度はH28.1月に一時的にカルシウムイオンや塩化物イオン、硫酸イオンが多くなったが、これは周辺に散布されたと推定される融雪剤の成分を含む融雪水の流入が影響した結果と思われる。

ヘキサダイアグラム

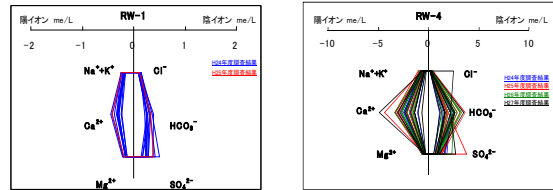
H16~19年度



H20~23年度

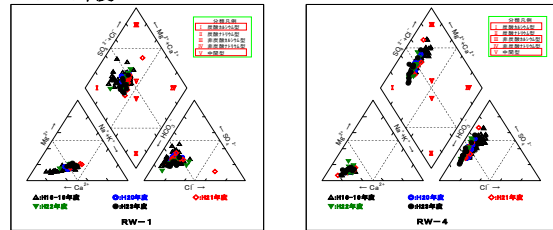


H24~27年度

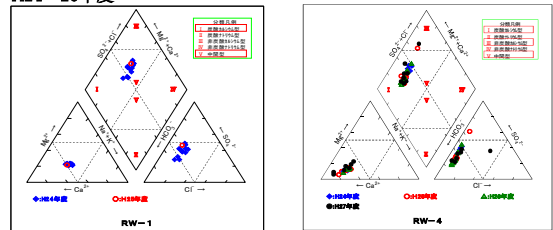


トリニアダイアグラム

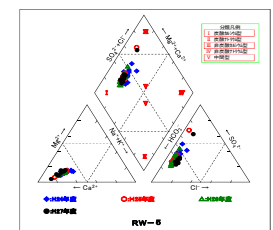
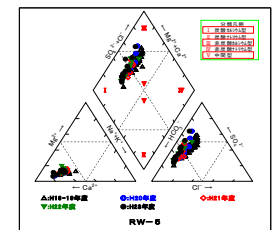
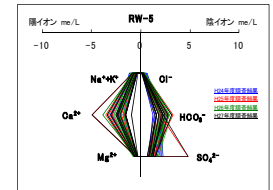
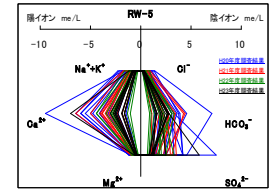
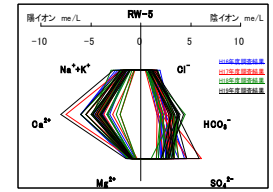
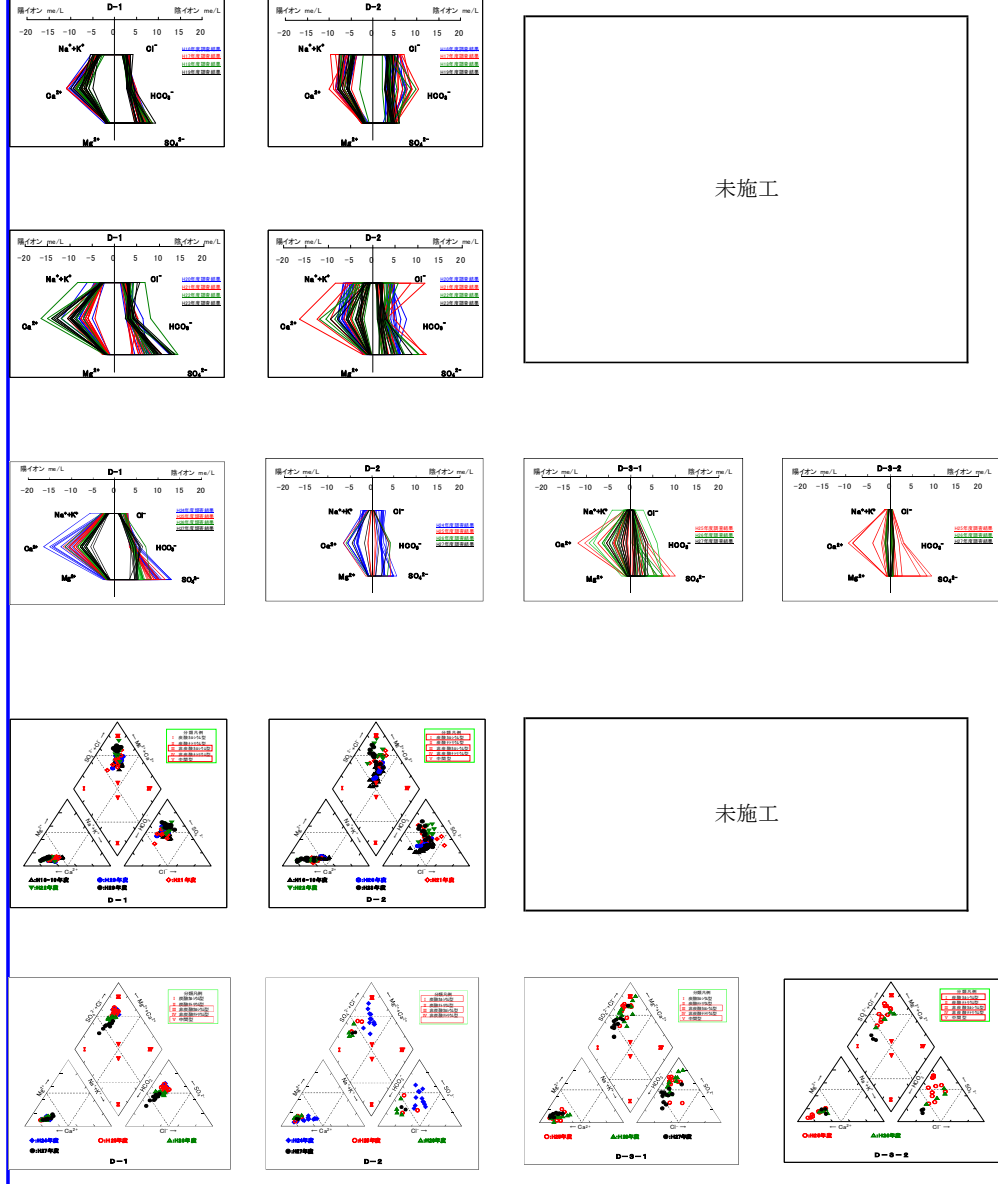
H16~23年度



H24~26年度



排水D-1、D-2、D-3-1、D-3-2流入



3.排水

■ 環境基準項目

実施した項目は、比較参考とした排水基準に全て適合していた。(H27.4.20、H27.7.24、H27.10.20、H28.1.20実施)

■ 生活環境項目

実施した項目は、pH以外はすべて比較参考としている排水基準に適合していた。
H24年度の対策工事完了に伴う、場内の排水系統の変更により、これまで流出が確認できていたD-2においては降雨時以外の流量が確認できなくなった。なお、H25.5.20の試料はD-2上流に位置する既設調整池から溜まり水を採水していることから水質に変化がみられる。

排水D-3-1、D-3-2は、降雨状況によって流量が大きく変化し、それに伴い分析結果にばらつきがみられる。

また、排水D-3-1、D-3-2は、H26年4月～7月にかけて、pH、BOD、COD等に変動が見られた。

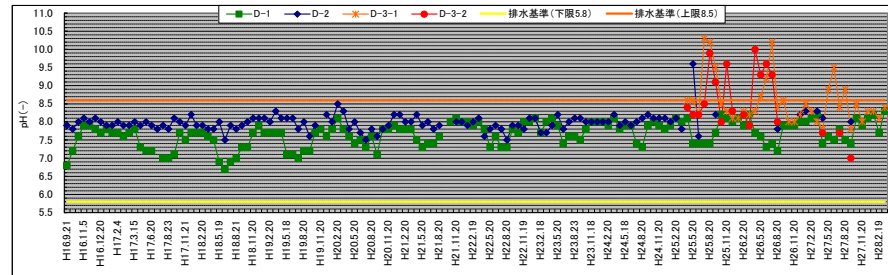
これは、水路内の藻類による光合成や、植物由来の有機物の溶出によるものと考えられ、その後の濃度に上昇傾向は見られないことから、植物の生育旺盛な高温期特有の現象と考えられる。

また、H26年8月に場内止水壁の推進工が実施されたが、この工事による周辺環境への影響も見られない。

①水素イオン濃度(pH)

pH値はD-3-1において5月、6月、8月に、排水基準値5.8～8.6の範囲を超過した。

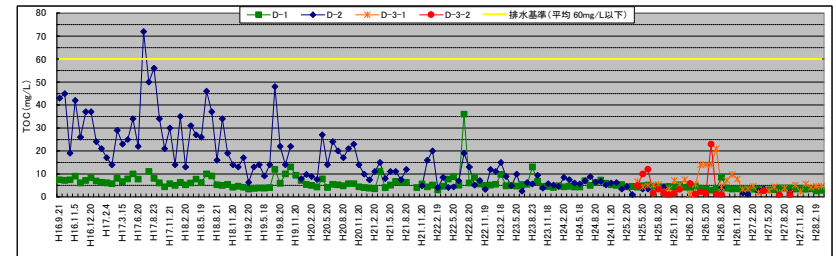
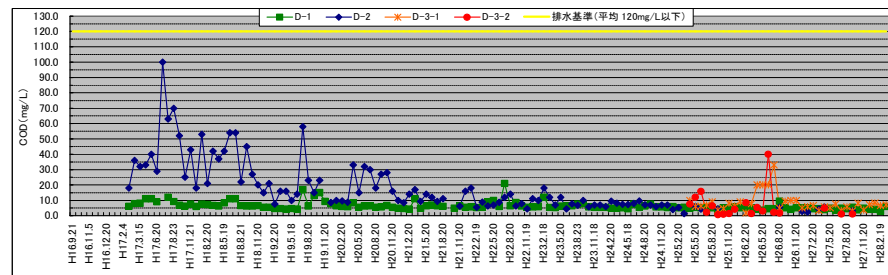
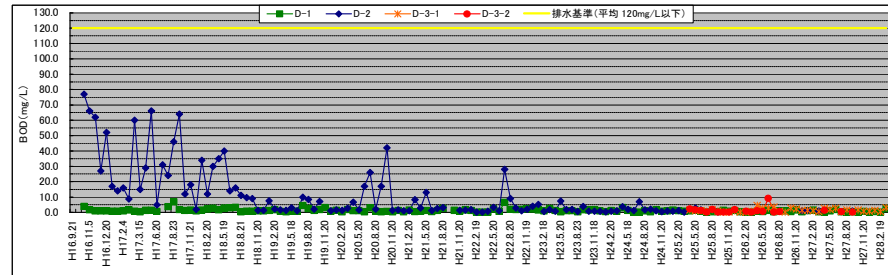
超過した要因は、昨年度と同様に水路内部に藻類が繁茂していたことから、付着藻類の光合成による影響と推定される。



②生物化学的酸素要求量(BOD)、化学的酸素要求量(COD)、有機体炭素(TOC)

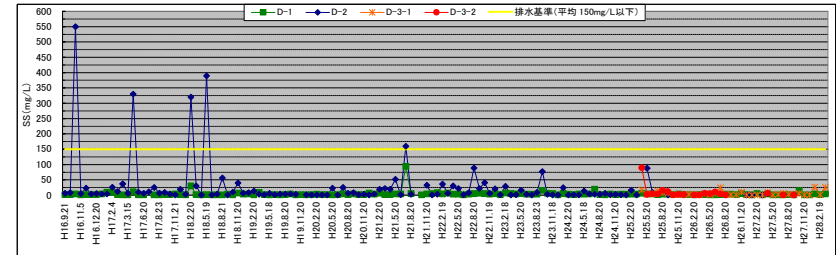
BOD、CODは、排水基準の日間平均値120mg/L以下に、TOCは排水基準の日間平均値60mg/L以下に適合していた。

4地点共に本年度も低い濃度で安定している。



③浮遊物質量(SS)

排水基準の日間平均値150mg/L以下に適合していた。



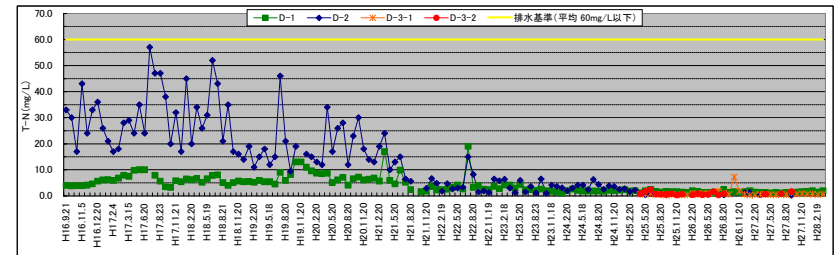
④全クロム(T-Cr)

すべての調査日において定量下限値未満であった。排水基準値2mg/L以下に適合していた。

⑤全窒素(T-N)

全ての調査日において、排水基準の日間平均値60mg/L以下に適合していた。

H21年6月までD-2の排水については生産活動がなされていない事業場としては、全窒素濃度が高く検出されていたが近年は低い濃度で安定している。要因としては、埋設された廃棄物からの溶出影響が考えられていたが、除去や排水経路の変更により溶出量の影響が少なくなっている。本年度は低い濃度で推移し、場内からの影響はないと考える。



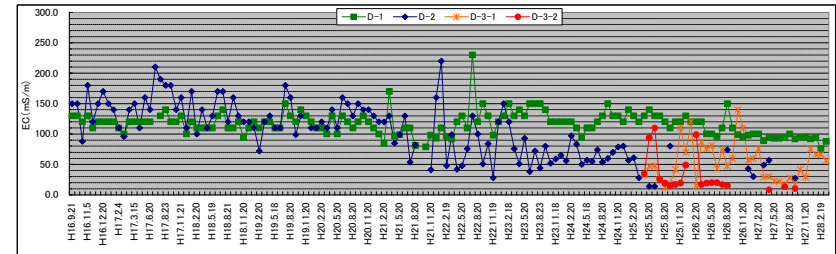
⑥電気伝導率

地点別では、D-1に比べて、D-2が高めの濃度を示していたが、H21年6月以降は排水経路及び新設調整池の設置等により、変動傾向は変化している。

D-1は、H22年度以降は高めの濃度で推移していたが、平成24年以降は比較的安定している。

D-2は、H21年度以降は低めの濃度で推移しているが、降雨状況に起因し、沈砂池及び既設調整池へ場内表流水の流入状況により濃度が大きく変動する。本年度は2回のみ測定であり、値はばらついている。

D-3-1は、29～75mS/mの間で変動し、D-3-2は、降雨のあった3回のみ測定であり、全て低濃度であった。



⑦イオン類

イオン組成は、中間型～非炭酸カルシウム型(炭酸カルシウム型)で推移している。

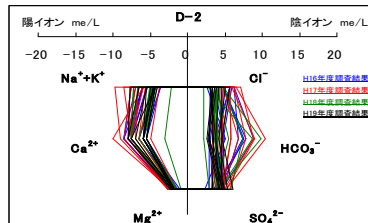
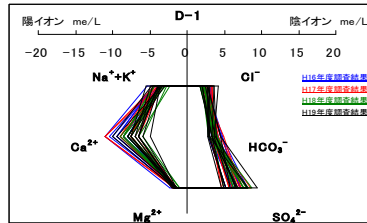
D-1は、調査開始以降、カルシウム、硫酸イオン濃度が上昇し、水質パターンは中間型から非炭酸型へと移行している。H24年度以降は、カルシウム、硫酸イオン濃度は低下傾向にあり、H26年度は概ね中間型を示している。

D-2では、過年度から、降雨による表面水及び土砂の流入や、廃棄物層からの浸透水の影響を受け安定していなかったが、H23年度以降は、変動幅は小さくなり、H25年度以降は降雨時以外は流水が見られない。

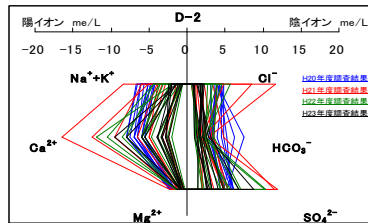
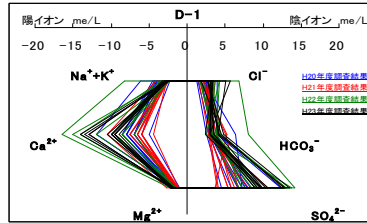
D-3-1、D-3-2は、各イオン成分とも低濃度で検出されている。

ヘキサダイアグラム

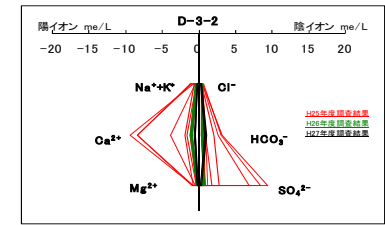
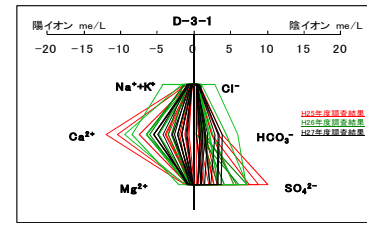
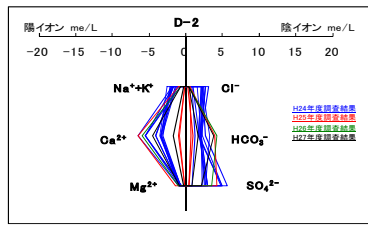
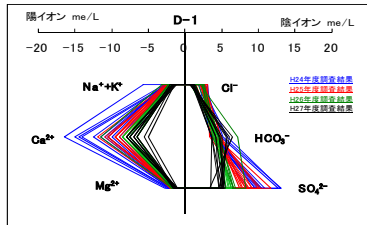
H16～19年度



H20～23年度

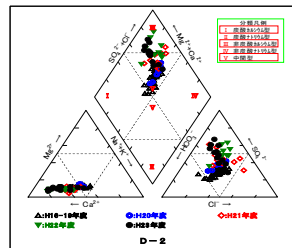
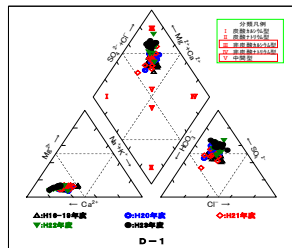


H24～27年度

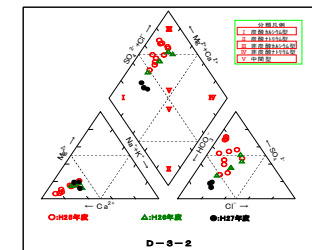
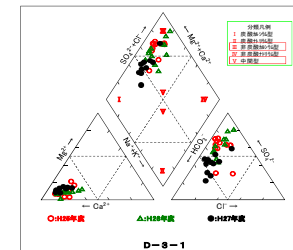
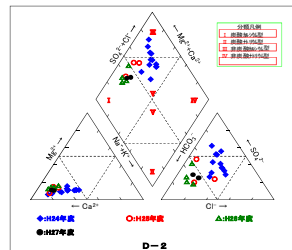
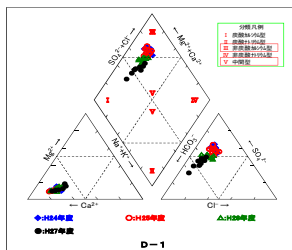


トリニアダイアグラム

H16～23年度

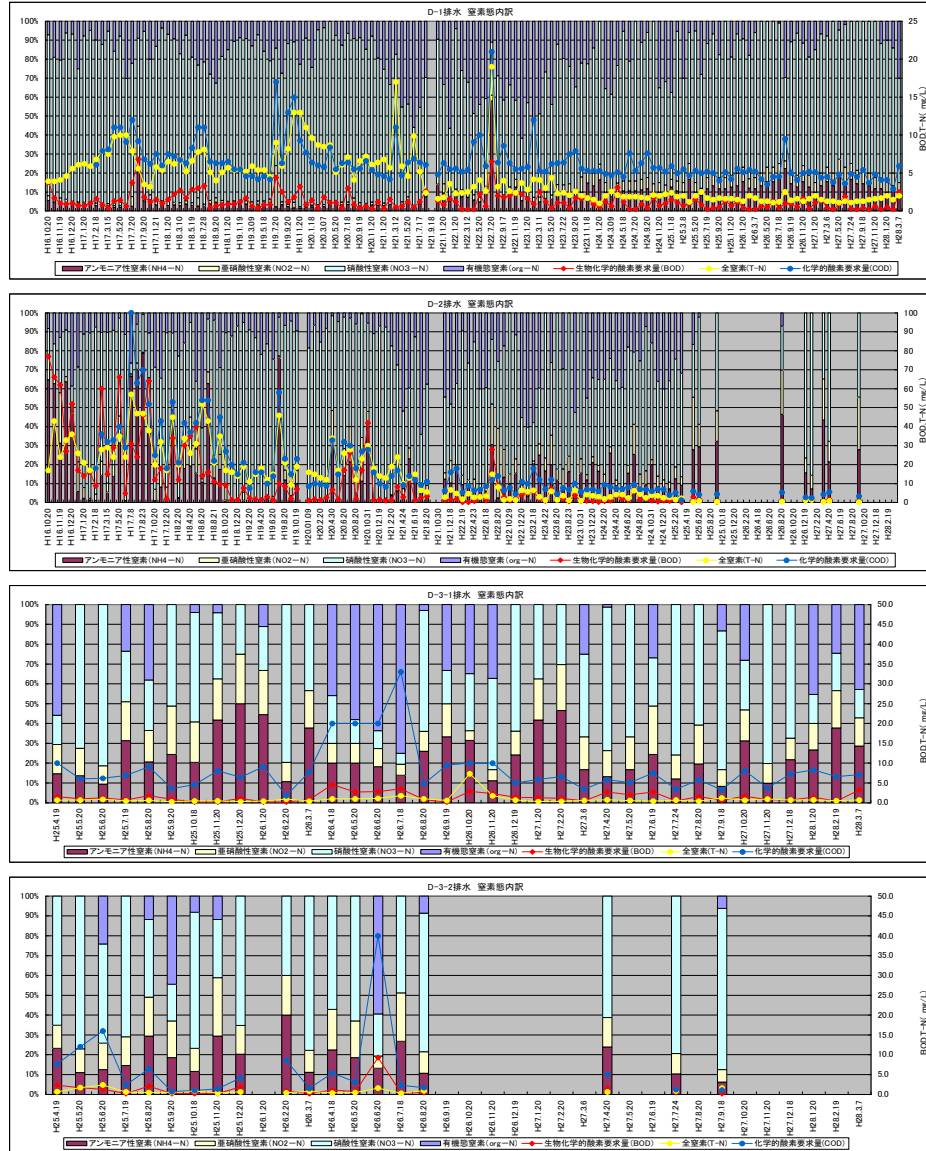


H24～27年度



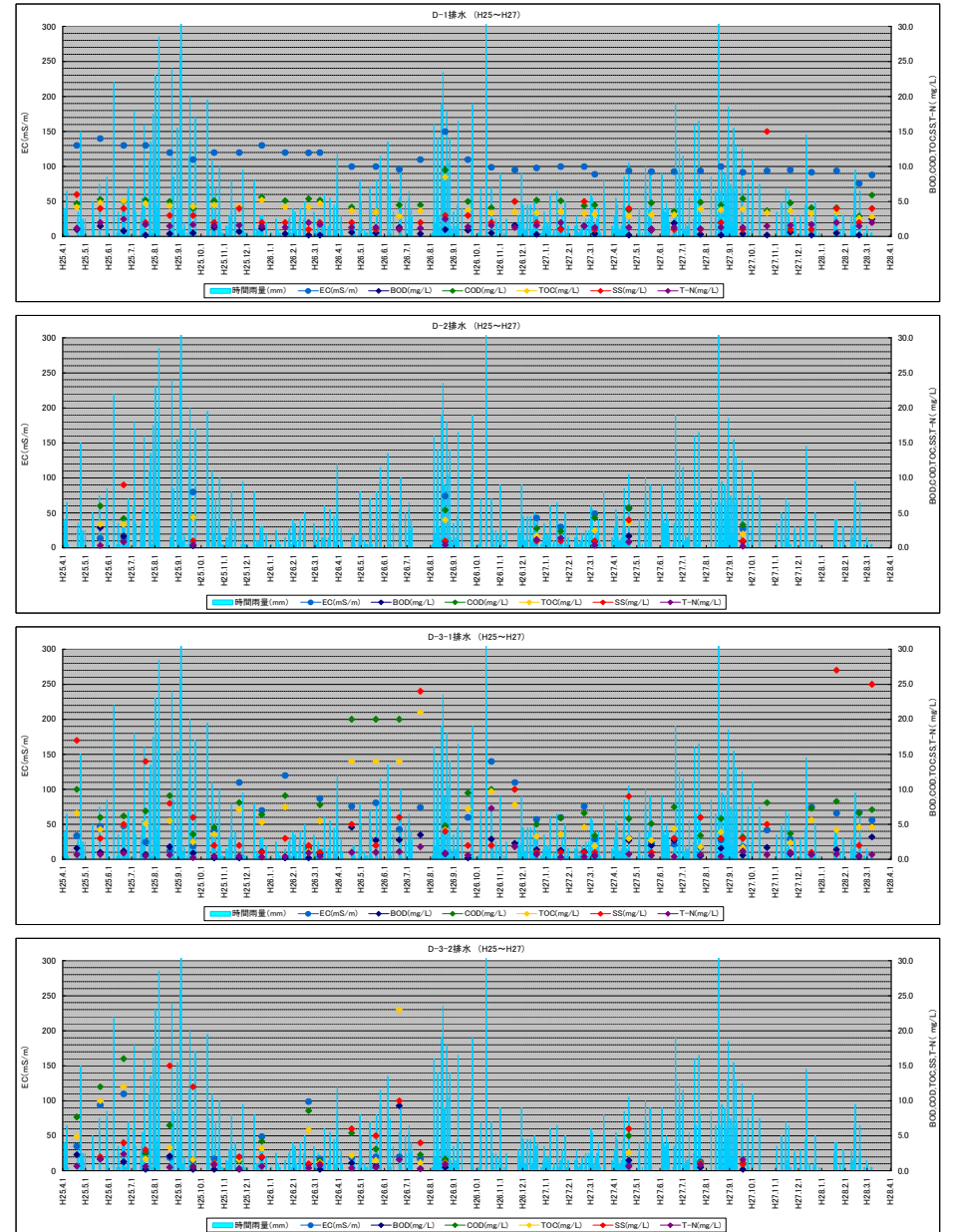
⑧窒素態内訳

D-1は、アンモニア性窒素がH25年度以降若干の上昇傾向が見られるが、その後はばらつきはあるが上昇傾向は見られない。
 D-2は、当初アンモニア性窒素濃度が高い割合となっていたが、H21～24年度は全体的に低い割合で推移し、H25年度以降はH21～24年度と比較して高めの割合であった。本年度は同程度であり、過去2年はばらつきが大きい。
 D-2及びD-3-1、D-3-2のT-N濃度は低濃度であることから、これらの窒素態内訳は僅かな内訳のバランスによってばらつきがみられると考えられ、その内訳のバランスは、主として流量に左右され、流量が少ない中では低濃度のT-N濃度でも変化すると推察される。D-2、D-3-2は降雨時以外は流水が観測されない状況である。
 また、排水D-3-1、D-3-2は、pH、BOD、COD等に変動が見られた。
 これは、水路内の藻類による光合成や、植物由来の有機物の溶出によるものと考えられ、その後の濃度に上昇傾向は見られないことから、植物の生育旺盛な高温期特有の現象と考えられる。



⑨降雨量と分析数値の相関性

降雨量(時間降雨量)と各分析数値の相関について、時間降雨量・定期サンプリング時の数値をH25年度より下記グラフに示す。対象とする分析項目は、BOD、EC、SS、TOC、T-N、COD とする。降雨量と共に特に変動を示しているのは、COD、TOC、SS、T-N、ECである。SSは、降雨時の表面水の流下により、降雨直後は、比較的高い数値を示すが、降雨時とサンプリング時が一致していないため、その相関は正確には確認できない。



4.河川底質

■ 含有量基準項目

実施した項目は、比較参考とした土壌汚染対策法の土壌含有量基準に全て適合していた。
鉛、砒素、ふっ素以外の項目は定量下限値未満であった。
ダイオキシン類も底質の環境基準値150pg-TEQ/gを大きく下回る結果であった。
周辺への影響は特にないと考えられる。

5.土壌

■ 含有量基準項目

平成28年1月に実施したダイオキシン類の分析結果は、調査指針値250pg-TEQ/gを下回る結果であった。

6.大 気

■ 大気環境

平成20年度から、調査地点 A-3での測定を実施している。
ダイオキシン類は、環境基準に適合していた。

■ 周辺データとの比較

本調査結果と岐阜市内の大気汚染常時監視測定局データを用い比較を実施した。
調査地点A-3は、周辺近隣測定局の1/2～1/3程度の濃度であった。

資料種別		大気				
調査地点名称		A-3				
調査時期		春季調査	夏季調査	秋季調査	冬季調査	平均値
資料採取 年月日	ダイオキシン類	H27.5.25～5.26	H27.7.2～7.3	H27.10.5～10.6	H28.1.13～1.14	-
		24時間測定				
槽洞 (A-3)	ダイオキシン類(pg-TEQ/m3)	0.0170	0.0065	0.0660	0.0260	0.0289

資料種別		大気				
調査地点名称		近隣測定局				
調査時期		春季調査	夏季調査	秋季調査	冬季調査	平均値
資料採取 年月日	ダイオキシン類	H27.5.22～5.29	H27.7.1～7.8	H27.10.2～10.9	H28.1.12～1.19	-
		7日間測定				
岐阜北部	ダイオキシン類(pg-TEQ/m3)	0.0130	0.0190	0.0079	0.0170	0.0142
岐阜中央		0.0290	0.0350	0.0190	0.0110	0.0235